

望岳山荘



中嶋 嶺雄

多くの注目を集めた国際教養大学が、全国初の公立大学法人として秋田県雄和町に開学し、早くも一カ月半が過ぎた。近隣の東北六県はもとより、遠く沖縄や奄美大島(鹿児島県)、五島列島(長崎県)などから、大変な入試競争率(前期日程は二・三・二倍、後期日程は四五・二倍)をクリアして全国各地から入学した学

生たちは、多くの外国人教師によってすべてが英語で行われる授業にみな生き生きと励んでいる。入学式直前のTOEFLテストで能力別に少人数のクラスを編成したが、一年次の英語集中課程(EAP)では七・五週毎のテストでクラスが再編されるので、大いに頑張り甲斐があるようだ。二十四時間開館の図書館では、「こんなに勉強したのは初めて」という学生たちが深夜まで自習している。

定員二〇〇名のところを「暫定入学生」(成績優秀なら一年後に正規学生になれる)を含めて新入生二四七名を受け入れた国際教養大学は、すべての学生に一年以上の留学を義務づけているが、開学してみて予想

外だったのは、学生全員が個室全寮制の生活に大いに満足していて寮生活を楽しんでいることである。

私自身も、秋田杉の美しい林を背にした大学のゲスト・ハウスから、森の小径を五分程歩くとキャンパスに着くので、先日までは水

化の時代は同時にマイゼンティティの時代でもあるので、これまでもっとも非国際的だった(たとえばパスポートの取得率は全国最低等)秋田県は、一方で自然や伝統が大変に個性的なので「国際教養(International Liberal Arts)」

国際教養大学の開学

芭蕉やゴゼンタチバナの群落を眺めながら通学するという醍醐味を満喫した。

入学式では、新渡戸稲造の英語原文の『武士道』を共通の必読書にしようとする語で訓辞し、「諸君の中から二十一世紀の新渡戸が出ることを期待している」と結んだのだが、グローバル

という新しい学問を培うにはもっともふさわしい場所なのかもしれない。

それにしても、国際教養大学の発足までに秋田県では、長野県での「ダム論争」以上に激しい議論が重ねられてきた。二十一世紀の高等教育をめぐってこれほどの論争があった県は、

秋田県以外にない。従って私自身もきわめて重い責任と固い決意で学長への就任をお受けしたのだが、それだけに開学の成功を喜ぶ県民の声も強く、この五月二十二日には全県をあげての祝賀会が秋田市で催され、文部科学省からも御手洗康・事務次官が出席された。

スズキ・メソッド出身の国際的なヴァイオリニスト渡辺玲子さんには、特任教授として芸術・芸術論(音楽と演奏)の授業を担当しているの、祝賀会では得意のカルメン幻想曲(ワックスマン作曲)を弾いていただいた。

本学のトップ諮問会議(議長は明石康・元国連事務次官)のメンバーでもある評論家の大宅映子さんに

は、「国際人とは」と題してユニークな記念講演をしていただいた。

この六月中旬に始まるサマープログラムには世界各国から五十名以上が来ることになっており、キャンパスは異文化空間としてさらに輝くことである。

本年度の入試では、ICU(国際基督教大学)、東京外国語大学、早稲田大学、大阪外国語大学、津田塾大学などとの併願者が多く、長野県からは一名しか入学しなかったが、将来、国際社会で存分に活躍しようという志を抱いている信州の若者には、明年以降の入試に是非多数挑戦していただきたいものと願っている。(国際教養大学学長 松本市出身)